

## 平成28年度の要請訪問を振り返って

「【県北版】学校教育指導の重点」、「【県北版】リーフレット」、「【参考資料】確かな学力の向上のために」で示した「授業づくりの6つポイント」、「学習基盤づくり」、「特別支援教育の充実」の評価の観点に照らした成果と課題をまとめました。

## 問題解決的な学習を中軸とした授業の充実

## 授業づくりのポイント1

## 単元のねらいと子どもの実態等を踏まえ、系統性を図った単元構想の工夫

- 単元のねらいをとらえた系統性や関連性等のある単元を構成しているか。
  - 小学校から中学校、中学校から高等学校と、次の校種の学習との関連性を分析する教師が増えてきている。中には、小学校から高等学校までの12年間の長期的な見通しをもって単元の指導計画を立てる教師も見られた。
  - 単元のねらいの把握が不十分なために、ねらいからまとめまでの一貫性に欠ける授業が散見された。学習指導要領を基に単元のねらいを明確にし、何をどのように学ばせるのかを明確にした教材研究に取り組む必要がある。
- 普段の授業や各種調査から単元展開や授業に生かせる実態把握を行っているか。
  - 全国学力・学習状況調査や県学力調査の解答類型や誤答の分析を行った上で子ども一人一人の実態を把握し、その実態に応じた指導内容の重点化を図ったり、指導方法を工夫したりする授業案が見られた。
  - 教師の予想とは異なる反応に対して、十分に取り上げられず教師が主導的にまとめる場面が見られた。各種調査やレディネステスト、事前アンケートを活用して、子どものつまずきや反応の予測を十分に行っておく必要がある。
- 目指す子どもの姿を具体的にとらえ、指導に生かせる評価計画を立てているか。
  - 知識・理解のみに焦点を当てるのではなく、単元を通して育てたい資質・能力を明らかにして、単元の評価計画を立てている授業案を多く見るようになった。
  - 評価が終末段階に位置付いているために、本時の授業内で指導に生かせない場合があった。指導と評価の一体化を念頭に置き、評価結果を次の指導にどのように生かすかについて、授業案に明記したい。

## 授業づくりのポイント2

## ねらいからまとめまでの整合性を図り、子どもの思考を大切にしながら、目指す子どもの姿と手立てを明確にした授業設計

- 単元のねらいから本時のまとめまでの整合性を図っているか。
  - 多くの学校において、「ねらいからまとめまでの整合性」を授業改善の重要な視点として取り上げている。事前研究会で子どもの思考の流れを想定して検討している事例があった。
  - 単元のねらいを達成するために、本時の学習をどのように発展していくのかを教師が十分に理解していないことがあった。単元構想を踏まえた授業設計を心がけたい。
- 子どもが課題をもち、解決に取り組むための具体的な手立てを講じているか。
  - 課題解決に向けて、子どもが主体的に取り組むように、教師が言語活動を手立てとして位置付けている。その効果を高めるよう熱心に校内研修を行っている学校が多く見られた。
  - 事前に準備した手立てにこだわりすぎるために、子どものつぶやきや反応を生かしきれない場面がある。子どもの実態を的確に理解し、様々な反応を想定して子どものよさを瞬時に認めることができる教師でありたい。
- 子どもの思考の流れを想定した構造的な板書計画になっているか。
  - 「めあて」や「まとめ」の位置や色を統一して教科の特性を考慮した構造的な板書を研究するなどの取組が見られた。また、板書計画により常に授業の全体像を念頭において授業を行っている教師も見られた。
  - 綿密な教材研究を行い、教えたい内容が多いゆえに教師主導の傾向が強まることもある。一人一人の個性や興味・関心をとらえ、子どもの考えを位置付けた板書計画を作成し、授業設計に生かしたい。

### 授業づくりのポイント 3

#### 必然性があり意欲が高まる学習課題の設定と解決の見通しをもたせる工夫

- 子どもにとって考える必然性があり、解決への意欲が高まる学習課題を設定しているか。
  - 生活場面から問題を取り上げ、子どもの疑問から課題を設定し、学びに必然性をもたせた授業が見られるようになった。子どもの「やってみたい」「上手になりたい」「できそうだ」「もっと〇〇したい」という学習意欲を高めるような既習事項の確認や課題提示の工夫が見られるようになってきた。
  - 課題設定、めあての設定まで教師主導となり、子どもが受け身となっている授業もまだ多い。子どもが本時の課題で何を学びたいのか、どのような力を身に付けたいのかを考えさせ、子どもの「問い」を学習課題につなげる発問を工夫する必要がある。
- 子どもが解決の見通しをもてるように、課題解決の方法や調べる視点等をもたせているか。
  - 本時の課題解決に必要な既習事項の確認をしたり、考える視点を自然と想起できるように学級の掲示を工夫したりすることで、子どもに解決の見通しをもたせる授業が多く見られた。
  - 子どもが本時の課題をどのように捉えたか、見取る手立てが不十分な授業が散見された。子どもがどのような見通しをもったのか、ペアで確認させるなどして見取る場面を設定することを大切にしたい。

### 授業づくりのポイント 4

#### 思考を促し、見取り、生かす教師の働きかけの充実

- 考える視点や方法、手がかりを明確にもたせるとともに、思考を促す発問を行っているか。
  - 一問一答型の発問から、多様な考えを促す発問への転換を意識して実践している授業を多く参観することができた。子ども一人一人が思考を働かせ、自分の考えをしっかりもつことができていた。
  - 子どもが何について考え、どのような結論を出せばよいのかが分からずに、自力解決に向かう場面が見られた。自分の考えをもつときに、視点を与えたり観点を整理したりして、何についてどのように考えればよいのかを子どもにつかませることが重要である。
- 適切な机間指導により、子どもの学習状況等を見取り、本時における次の授業展開に生かしているか。
  - その時間に子どもに考えさせたいことは何かを明確にし、机間指導中に座席表や児童生徒名簿を使って思考の傾向を見取り、全体的話合いに生かしている授業を見ることができた。
  - 意図的・計画的な机間指導とはなっていない授業も見られた。机間指導の中で、見取りと個別指導を効率的に行えるような計画があると次の授業展開に生かすことができる。そのためにも、予想される子どもの反応はあらかじめ想定して授業に臨みたい。
- 一人一人の学習状況を把握し、個に応じた適切な支援の手立てを講じているか。
  - 子どもの発言をよく聞き、それを称賛・価値付けしながら学習活動に生かす教師の姿が多く見られた。子どものよさを認め、有用感、充実感をもたせることで、次時への意欲につなげていた。
  - 教師が期待する考えのみを価値付ける働きかけも見られた。多様な考えを認めながらも、「本時のねらい」を明確にもち、目指す子どもの姿をイメージすることで、子どもの思考に寄り添った個に応じた働きかけが可能になる。

## 授業づくりのポイント5

### 思考の共有と吟味を促す学び合いをコーディネートする力の向上

- 思考の共有と吟味を通して、子どもが新たな考えをつくり出せるような学び合いをさせているか。
  - ホワイトボード等のツールを活用したり、「要約」や「予想」「再生」などの子ども同士の考えをつないだりする教師のコーディネートが見られるようになってきた。
  - 学び合いが目的となってしまう、学習のねらいを達成するための活動になっていない授業が見られた。子どもにねらいをしっかりと把握させる段階を大切にしたい。
- 学び合いの目的を踏まえた学習形態を工夫しているか。
  - 個人での学習からペア学習やグループ学習を経て、全体でその内容を共有するような場を設定している授業が多く見られた。
  - 学習形態の目的が不明確な授業、特定の「学習の型」を優先して本時のねらいとずれてしまう授業が見られた。より効果的な学習形態や支援の在り方について研修を深める必要がある。

## 授業づくりのポイント6

### 学習内容の定着を図る「振り返る活動」の充実が図られていたか。

- 課題との整合性を意識しながら、学習内容の定着を図る「振り返る活動」になっているか。
  - 本時の学習内容を板書で振り返りながら教師と一緒にまとめたり、キーワードを示して自分の言葉でまとめたりするなど工夫した取組が見られた。
  - 振り返る視点が不明確なため、学習感想の内容が、「楽しかった」「おもしろかった」という感想で終わってしまう授業が見られた。見通しの段階から、子ども自身が振り返る視点を明確にもち、学習活動の中でも意識できるようにする必要がある。
- 学習を振り返ることができるノートになるよう、適切な指導を行っているか。
  - 学校全体で共通理解を図り、学習を振り返ることができるノート指導を実践している学校が見られた。板書を写すだけでなく、どこに、何を書くのかを、発達段階や教科等の特質を考慮して具体的な指導がなされており、本時の学習内容が意識化され、確かな定着につながっていた。
  - ワークシートを使用した授業の終末で、あらかじめまとめが書かれていて、空欄の穴埋めを行って、まとめをしている授業が見られた。学習内容や見方・考え方を子どもたちの言葉でまとめたり説明したりすることで、確かな定着につなげていきたい。
- 学習内容の再生の場やねらいに合った適用問題を設定して、学習内容の定着を図っているか。
  - 授業案に適用問題を位置付ける授業が多くなってきた。適用問題については、一般化を図ることができたり理解を深めることができたりするよさがあるので、引き続き、本時のねらいに合った適用問題を位置付けたい。
  - 時間内に適用問題やまとめまでいかない授業や、知識の確認程度で終わっている授業が見られた。導入や展開の段階での活動を効率的に行わせ、十分な時間を確保する必要がある。
- 自己の変容や成長を自覚させることにより、充実感や満足感を味わわせ、次の学習への意欲を高めているか。
  - 授業の終末だけでなく、各段階で子どもの達成度を見取り、個別指導や全体での確認に生かす教師の働きかけが見られた。
  - 自分の成長を自覚させようとする意識が弱い授業が多く見られた。自分の考えがどのように変容したか、友達とのかかわり合いで考えがどのように深まったかという学びのプロセスを振り返ることを意識的に行いたい。

## 学習基盤づくり

### 学習・学級集団づくり

- 学校経営方針の明確化と全職員が組織的に関わる体制づくりができているか。
  - 学校全体で共通の「学習の約束」を決めて行っているところは、学力向上の面でも成果を上げている。例えば「〇〇学校学びの手引き」という形で授業の約束を教師と子ども、家庭が共有している取組などがある。
  - 教室環境やノートづくり等が教師一人一人の力量に任されていることが多いように感じた。「板書を写すだけではなく自分の考えをノートに書かせる取組」を学校全体行うなど、各種調査やアンケート等の分析から課題をとらえて、組織的に取り組んでいけば更なる成果が期待できる。
- 全員が気持ちよく学ぶためのルールが明確化・共有化されているか。
  - 「友達の話をつなげながら聴く」「友達の話最後まで聴いてから自分の意見を話す」など、全員が気持ちよく学ぶためのルールが確立された学級が多く見られるようになった。「誰もが認められ、尊重し合い、互いに高め合う集団づくり」が大事であることは各学校において浸透してきている。
  - 学級毎に学習のルールがつけられている学校が見受けられた。学校全体で子どもの実態や発達段階に応じたものを作成し、つながりのある実践をしていけば、子ども達に発達段階に合った主体的な学習態度が養われていくと思われる。
- 一人一人を大切に、結果だけでなくプロセスを認め、奨励、称賛する教師の姿勢が見られるか。
  - 授業において、教師が子どもの発言やつぶやき等をとらえて「承認・奨励・称賛」する場面が多く見られた。例えば、教師が子どもの発言をつなげながら聞き、褒め、価値付けている姿である。
  - 教師の発問に対して子どもがこたえる場面において、教師が予想している発言だけを称賛し、それ以外のものに対しては、取り上げない場面が見受けられた。子どもの素直な発言、疑問、つまずき等も取り上げ、そこから授業のねらいに迫っていけるようなプロセスを大事にしたい。
- 相手を尊重しながら自分の意見を主張できる態度が育成されているか。
  - グループでの話し合いの中で、友達の考えを受けて自分の考えを付け足す姿や友達の考えで分からないところを尋ねることによりその考えを明確なものにしていく姿が見られた。互いに学び合う学習集団づくりが進んでいる。
  - グループの話し合いで、双方向になっていない場面が見られた。まずは、相手の話をうなづきながら聴く、分からないところは質問するなどの「共感」「グループ全体で考えを広げ、深めていこうとする姿勢」などを育てていきたい。

## 特別支援教育の充実

### 一人一人のニーズに応じた指導の充実

- 家庭や本人との丁寧な教育相談に基づく個に応じた支援の充実が図られているか。
  - 支援を必要とする子どもへの合理的配慮として、黒板周りに余計なものを掲示しないなど集中しやすい環境を設定する、見通しがもてるようなスケジュールや分かりやすい手順表を掲示するなど、個に応じた配慮や工夫を行っている学校が多く見られた。通常学級でも同様の配慮を行うことで、支援を必要とする子どもだけでなく、学級全体の落ち着きにつながっているといった成果を上げていた学校もあった。
  - 通常学級では、支援を必要とする子どもだけを特別扱いできないとの考えから、保護者・本人が求めている支援を行うことに躊躇しているといった場合がある。違いを

認め合う学級の土壌を大事にしながら、保護者・本人の願いや教育ニーズを確認し、提供可能な合理的配慮を話し合いながら決定していく必要がある。

- 「個別の教育支援計画」を保護者とともに作成・活用し、「個別の指導計画」を基にした授業の工夫・改善が行われているか。
  - 「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」との関連を踏まえ、目指す子どもの姿や子どもの特性、必要な配慮などが授業案上で明確になっている授業では、ねらいに迫るための具体的な手立ても用意され、子どもが主体的に学んでいることが多かった。
  - 特別支援学級の「生活単元学習」や「自立活動」の授業で、子どもに何を身に付けさせたいのかがあいまいで、活動することが中心になっている授業が見られた。子どもの興味・関心、意欲を大切にしながらも、「何を身につけさせたいのか」「どんなことができるようになってほしいのか」など目指す子どもの姿と支援の手立てを明確にした授業づくりを心がけたい。

### **集団の中で助け合い、共に伸びる友達関係づくりへの支援の充実**

- 互いのよさや特性等を認め合う集団づくりの推進がなされているか。
  - 支援を必要とする子どものよいところやできることを生かして活躍できる場面を設けたり、間違いであっても子どもの発言のよいところを肯定的に評価したりすることで、子どもが前向きに学習や活動に取り組もうとする姿が見られた。
  - 衝動的な行動や暴力等の問題行動が継続的に生じているような場合には、本人の自己評価だけでなく周囲からの評価も低くなり、それが更なる問題行動等につながる場合もある。担任が同僚や管理職等に相談しやすい雰囲気をつくるとともに、管理職や特別支援コーディネーターを中心にケース会議を開催したり必要に応じて関係機関と連携したりするなどの対応をできるだけ早く行うようにしたい。
- 教師が仲立ちとなり、適切に関わり合わせるための支援の工夫がなされているか。
  - 通常学級では、支援を必要とする子どもに個別に配慮するだけでなく、周囲の子どもの座席配置を工夫したり、教師が仲立ちとなって子ども同士をつないだりするなど、学び合う環境を工夫している取組が見られた。
  - 特別支援学級と通常学級の交流及び共同学習では、学年が上がるにつれて友達関係に課題が生じたり、各教科等の学習が難しくなったりするなどの悩みが担任から多く聞かれた。双方の担任間でねらいを焦点化し、効果的な実施方法について話し合うとともに、支援に当たる特別支援教育支援員などともこれらのことを確認したい。